

嗅覚でたどる街の風景

岸真由美

三八八——何の数字かというと、人間の鼻の奥にある嗅覚受容体の数だ。人間は三八八種類のにおいを認識できる。実は、この「におい」というものが、私は気になっ

り地図を調べてみると、そこはパリの一八区、中東・アフリカ系の移民が多く居住する地区であることが分かった。私はパリを訪問するよりも前に幾度か北アフリカの街を訪れたことがあった。そのせいで、鼻が記憶しているものがあつたのだ。人々が集まって暮らす場所が持っている特有のにおいだ。雰囲気と言った方がいいかもしれないが、私の場合、嗅覚が先にそれを知覚した。だから、やっぱり「におい」と呼ぶべきだろう。

私の頭の中では、その人のイメージと切りはなせない関係にある。

においがあるのは人だけでない。街にもにおいがある。パリを訪れた時の話。前もってホテルを予約していなかった私は、とりあえず泊まる場所を探すことから始めた。友人がくれた、ホテルの住所を書き留めたメモを手にも、地下鉄に乗り、目的地の駅で降りて地上に上がった。と、その時、デジヤブというかノスタルジーというか、そんな感覚に襲われた。なんだか、今自分が歩いている辺りのにおいには「嗅ぎ」覚えがあるような……。

私は方向音痴な上に、当時パリの地理に疎かったため、自分がどの辺りにいるのかを認識していなかった。帰国後、地名を頼

カの土地で出会った人々を思い出した。私のために鶏を二羽絞めて夜中に料理をつくって歓迎してくれた村人たち、粉を捏ね竈で焼くところまでホブズ（パン）の作り方を手取り足取り教えてくれた女性たち、数百キロの道のりをサハラのアアシスまで一緒にドライブしたある街の夫婦、大西洋に臨む砂浜で一緒に夕日が沈むのを眺めた友人たち——。その時の感情をもっと追体験したくなって、鼻を頼りに懐かしいにおいのする場所をパリの街で探し歩いた。

結局、パリ滞在の一週間を私はその地区で過ごした。宿泊先を選んだのはアルジェリア人の経営するホテルだった。素泊まりだったのに、アラビア語でちよつと挨拶す

ると毎朝コーヒーを入れてくれた。スイーツケースが壊れて急遽代わりの靴を買に行つた店の店主はチュニジア人だった。故郷にいる妻子の話を嬉しそうに話していた。毎晩夕食を食べに行つたファーストフード店はトルコ人の一家が切り盛りしていた。三晩通うと私の食の好みを覚えてくれた。

パリに住む彼らは、自分や自分の親たちももと住んでいた土地にあつたものを、現在居住する土地にも持ち込んでいた。食べ物、衣服、雑誌や新聞、そして——におい。暮らしの中で使う品々には、人のいろんな思い出が詰め込まれている。同じように、においもまた、自分たちの記憶と結びついている。そして、視覚的なものよりも、むしろ眼に見えないにおいの方が、時に、記憶と思いを鮮明に蘇らせるのだ。

街を語る時、たいてい取り上げられるのは視覚的な要素だ。観光スポット、ホテル、レストラン。通常、どれも紹介文とともに写真が掲載されている。観光ガイドブックにもにおいを載せてくれれば、においフェチとしては嬉しい限りなのだが……。

(きし まゆみ/アジア経済研究所図書館)